

「えっと、あ、ありがとう……」僕はサラダを取り皿に移して、フォークで口に越し――あ美味うまい！ もうなんかただのサラダだけでも死ぬほど美味しいし食べても食べても手が止まらないしもはや永遠に食べていられるような気が――ああシチューも美味しい美味過ぎて死にそう！

「うううううううううう……ぐすっ」

「うわ」

食べながら泣く僕と若干じゃっかんひきつる彼女だった。

「うえええええ……。美味しいよ……。お母さんの味がする……」

「……そう」

「僕お母さんいないけど」

「反応に困る冗談はやめてくれるかしら」

「これが最後の晩餐ばんさんでも文句ないや……満足……。うううううう……」

「……」

「あ、それでね、さっき僕が死にかけてた理由なんだけど」

「切り替え早いわね……」

ごはんを少し食べたらずうやくまともな精神状態になれたともいえる。死の淵から蘇よみがえったともいえるかも。

「えっと……どこから話せばいいのかわからないんだけど……」

僕は、ここに至るまでにあつたことを思い出しながら、

スプーンでシチューをすくう。

……美味しい！

「いちいち料理に感動していいからとつとつ話
なさい」

「あ、はい……」
しゃべ喋らされました。

○

「マクミリアくん。今日できみクビね。うん、今まで頑張がんば
ってくれてただけどさあ、ちよっと人員整理したくなっ

てね」

「俺、今度バンドマンとして独立することにしたんだよね……だから会社たた畳むことにしたんだ。だからごめん、これでうちの会社は倒産とうさんってことで」

「えー、単刀直入に申し上げますと、わが社は本日で倒産です」

「マクミリアちゃん。君きょうでクビね。お疲れ様」

「きみクビね」「倒産しちゃった」「クビ」「クビ」「倒産」「クビ」「倒産」以下略。

……以下略。

僕は不幸な人生を歩んできたと思う。

十四歳で孤児院を出て以来、今に至るまで送ってきた生

活は、あまり充実した日々じゃなかった。

毎日のように働き、少ない給料で頑張る日々。

三か月ほど働くとどういうわけか会社が倒産するか、僕自身がクビになる憂き目に遭^あつて、また新しい職場を探して、また倒産かクビになる。

僕は長いこと同じ職場に続けたことがまるでなかった。

「……やってらんない。いらいする」

そんな毎日ばかりだと嫌気も差すもので、独り立ちして三年が経った頃には、すっかりやさぐれた僕がいた。

あるいは不安定になりつつあるこの国のありさまが、結果的に僕を苛^{いら}つかせていたのかもしれない。

『その祈り、本当に必要？——大聖堂での祈りを自^じ粛^{しゅく}しましょう。祈りは皆のために』

その日、大聖堂へと続く大通りにはいつものように張り紙が並べられていた。

デザインやキャッチコピーを替えながらも、ずいぶん前からこの道に張り巡らされているらしい注意喚起は、大通りから大聖堂へと向かう人々を脅^{おど}すように飽^あきるほどに並べられているわけだけれど、そこを歩く誰もが見て見ぬふりをしていた。

この国唯一にして最高峰の遺産である『祈り』は、海に浮かぶこの国の中心部に位置している大聖堂にもたらされた奇跡だった。

大聖堂に行つて、祈りを捧げると、ごく稀に、それが叶えられる――らしい。

僕は生まれてこのかた一度たりとも祈りを捧げたことなんてないけれど、実際、祈りを叶えた人というのは数多くいるらしい。

この国の金持ちの中に祈りを叶えただけの者が何人いようか。難病を克服した者のなかで祈りに縋^{すが}っていた者が何人いようか。仲睦^{なかむつ}まじい恋人たちの中に祈りを捧げた者が何人いようか。